

目黒区美術館開館30周年記念

日本パステル^が畫事始め

一武内鶴之助と矢崎千代二、二人の先駆者を中心に

2017年10月14日(土) ~ 11月26日(日)

(38日間)

午前10時~午後6時(入館は午後5時30分まで)

月曜休館

入館料：一般 1000(800)円、大高生・65歳以上 800(600)円、中小生以下 無料

*障がいのある方は半額・その付添者1名無料、()内は 20名以上の団体料金

主催：公益財団法人目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館

読売新聞社、美術館連絡協議会

協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網、サッポロホールディングス株式会社

目黒区美術館では、開館30周年を記念して区民割引を実施しています。目黒区内在住、在勤、在学の証明書を受付でご提示いただくと、団体料金扱いとなります。(他の割引との併用はできません)

はじめに

知られざる画材、パステル

江戸末期にはじまり、明治になってより大きな流れとなった、日本人と「洋画」の関わりの歴史の中で、私たちに最も親しみのある画材と言えば油彩や水彩でしょう。油彩は「洋画」の中心となる画材として、そして水彩は取り扱いが容易なものと捉えられ教育の中でも大きな役割を果たしてきました。そんな中、同じく明治期に伝えられた画材のひとつが本展で取り上げるパステルです。

18世紀にヨーロッパで盛んに用いられたパステルは、19世紀後半になるとドガをはじめ何人もの画家が改めてその魅力を見いだしました。そんな時代を経た20世紀、海外に学んだ人々を中心に、日本の画家たちにもパステルを試みる者が少しずつあられ、パステルや制作に必要な紙、定着液などの輸入が増え、やがて大正末から昭和初期にはパステルそのものの国産も実現します。そして、このパステル国産とほぼ時を同じくして、パステル画の一般の人々への普及も試みられました。

顔料を主体とする素材を棒状に固めたパステルは、描く際には粉状となり、ベースとなる紙の上によりやくとどまった状態となります。そこから、原色、中間色ともに「美しい直接的な発色」、乾燥時間のない「速写性」という二つの大きな特色が生まれます。しかし、これまで一部の画家や愛好家をのぞき、パステル本来の可能性が日本では広く知られてきたとは言えません。確かに、時に儚ささえ思わせる豊かな中間色の美しい発色や独特の「風合い」など、一般にもその魅力の一端は知られていて、「パステルカラー」という言い方も定着しています。しかし、時に油彩をも凌駕するような、本来の多彩な描写の可能性が広く知られてきたとは言えず、パステル類から派生して教育用途で親しまれている普及的な画材と混同されることも少なくありません。

本展では、そんな「知られざる画材、パステル」を、パステルに魅せられて多くの作品を残した二人の近代日本の画家、矢崎千代二と武内鶴之助を中心にご覧いただけます。豊かで繊細な色彩を緻密な作品の中に活かしきった武内、世界各地のいきいきとした情景を、速写を武器に描いた矢崎、パステルへの取り組みは異なりますが、二人がそれぞれ研究や探求を重ねて生み出した多彩な表現は、パステルという画材の幅広さと奥深さを如実に示しています。そして、二人の個性的な試みの数々と、彼らが関わったパステルの普及活動や、特に矢崎が深くかかわったパステル国産化への道程は、近代の日本人が海外から移入された素材や方法論を独自のものとしていった興味深い例でもあります。

ほぼ同時代を生きた武内と矢崎の二人の画家は、これまでも美術館等での紹介があり(目黒区美術館が1993年に開催した武内鶴之助の回顧展『パステルのモノローグ』もそのひとつです)、コレクターはじめ愛好する人々も決して少なくはありません。しかし、明治以来の性急ともいえる「日本近代洋画」の歩みの中で、彼らとその作品の魅力が広く知られることなく今日に至っているのは、パステルという画材そのものの我が国における歴史ともどこか重なります。本展を通じて、パステルという知られざる画材について、そして、ともに同時代の人々に愛された二人の画家の画業に、あらためて注目していただければ幸いです。



① 現在の『 Gondra 』パステル

概要

明治以後、現代まで、パステルを用いたことのある画家は少なくありません。しかし、その多くは、油彩に比べて乾燥を待つことのない速写性や、独特の軽やかな色彩表現などに着目した、小品やエスキース、スケッチ類の制作、他の画材との併用で、「パステルによるパステルでない」と不可能な絵画作品」を追求した画家は極めて限られます。その中で、武内鶴之助と矢崎千代二は、数少ない「パステルを主たる制作手段とした画家」で、既に一部の愛好者等によって、いわば「双璧」として扱われることが定着しているのも頷けます。

その経歴や作風も大きく異なる武内と矢崎、二人の接点となっているのが、パステル国産の歩みと並行して行われた普及活動です。工業製品など様々なものの「国産化」が志向された大正から昭和初期、それまでフランス製やドイツ製などの輸入に頼っていたパステルも国産化が試みられましたが、この国産化を、パステルを熟知・熟考した画家として指導したのが矢崎千代二でした。そして同時期に行われたパステル普及活動では矢崎と並んで武内もまた重要な先駆者としての役割を果たしました。

本展は、武内鶴之助、矢崎千代二という二人の画家の仕事から、彼らがヨーロッパのパステル画に学び、念頭に置きつつ、それぞれ個性的なスタイルを確立し、ある種の「日本化」を遂げた様子をご覧ください。そして、作家たちの活動と同時に、画材そのものの「日本化」の過程も重要な要素として取り上げます。

構成

1. 武内鶴之助と矢崎千代二、二人の先駆者

目黒区美術館では、武内鶴之助とパステルの出会いの契機となった雲を描いた連作を中心に約40点の作品を所蔵していて、1993年には「武内鶴之助展パステルのモノローグ」を開催しました。矢崎千代二については、出身地にある横須賀美術館が多くの作品を収集しています。二人の作品は各地の美術館にも収蔵されているほか、近年は彼らの優れた作品を所蔵される愛好家の方も少なくありません。武内も矢崎も生前から愛好者の多い、作品数の多い作家で、本展ではこうした各地に残る作品の中から、二人の作家の多彩な表現の魅力を示す作品を厳選してご観いただけます。また矢崎作品については、矢崎とパステルの研究を進められている横田香世氏に特にご協力をいただき、同氏が調査にあたった矢崎が北京に残した1008点の作品についても、初めてその一端を写真でご紹介いたします。

2. パステル国産化への道とパステル普及運動

明治から大正前期には輸入のみだったパステルですが、1919年創業の王冠化学工業所による「ゴンドラ」の製造により国産化が果たされました。また、同社には矢崎千代二の指導を受けながら、パステル国産化・製品化が果たされた経緯を示す資料が多数残されています。本展ではこれらを中心に、初の国産パステル「ゴンドラ」登場の前後からその後の歩みについても、並行して行われたパステル普及活動と関連付けながら、画材としてのパステル研究と国産化の道程を概観いたします。

3. パステルの魅力、いくつかのエピソード

パステルといえば誰もが思い浮かべるドガやルドンの作品とそのほかの日本人作家による、今回主役の武内や矢崎とはまた違ったパステル表現や、パステルの諧調表現を銅版画に表した作品の不思議な魅力など、いくつかのトピックをエピソード形式で取り上げます。

●出品（作品および資料）：

武内鶴之助・矢崎千代二作品、合計約140点、その他国内外作家約20点、画材実物、素材類、書籍等印刷物、その他パステル画材関係資料

●関連催事の予定：

講演会、ワークショップほかを予定

詳細は目黒区美術館ウェブサイト (<http://www.mmat.jp>) をご覧ください



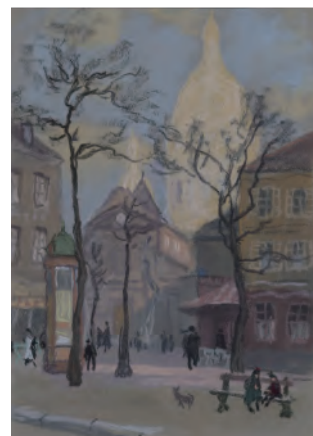
② 武内鶴之助 《ロンドン郊外》 1908〜12
パステル・紙 目黒区美術館蔵



③ 武内鶴之助 《雲》 1908〜12
パステル・紙 目黒区美術館蔵



④ 武内鶴之助 《風景》 1908〜12
パステル・紙 目黒区美術館蔵



⑤ 矢崎千代二 《モンマルトル》 1921
パステル・紙 郡山市立美術館蔵



⑥ 矢崎千代二 《リオデジャネイロ風景》 制作年不詳
パステル・紙 郡山市立美術館蔵

本展の中心となる二人の作家の略歴

武内鶴之助(たけうち つるのすけ)

1881/10/24(神奈川県・横浜市)～1948/8/25(栃木県・日光)

1881(明治14)年、神奈川県横浜生まれ。父はジャーディン・マセソン商会の社員で、幼い頃から絵画に親しむ。1904(明治37)年、日露戦争に出征し二〇三高地戦に参加。この間も暇を盗んで絵を描く。1906(明治39)年、白馬会洋画研究所で絵画を学ぶ。当時は主に水彩画を描いていたと思われる。1909(明治42)年、横浜正金銀行ロンドン支店副支配人の兄・金平を頼ってロンドンに渡り、ロンドン美術学校でブラングウィン(Sir Frank William Brangwyn, 1867-1956)らに師事して本格的に油彩を学ぶ。翌1910年にはロイヤル・アカデミーに油彩《ウィンブルドン公園》が初入選し、同年の第四回文展にも《倫敦郊外の夕暮》を送り入選。ロンドンでは同時期に在英した石橋和訓や高木背水、栗原忠二、三宅克己らと親しく交流し、石橋の紹介でアルフレッド・イースト(Alfred East, 1849-1913)に師事し大きな影響を受けた。

1910(明治43)年、または翌1911年、サセックスのアンバレー(Amberley)を写生旅行中にストット(Edward Stott)と偶然知り合い、同地に2年間滞在しストットの指導を受けた。武内のパステル使用は同じくパステル画を多く描いたストットの影響で、はじめは油彩制作の習作のためだったとも考えられる。その後、1912(明治45)年にはロイヤル・アカデミーに再度入選を果たし、翌年に帰国した。

帰国後は、光風会展、国民美術協会展、個展で発表を続け、主にパステルによる風景画、バラなど静物画で知られた。1929(昭和4)年に日本パステル画会が発足すると、同会の第一回展には矢崎千代二、岡田三郎助、石井柏亭、藤島武二らとともに顧問として出品。以後も各地での展覧会に出品するなどパステル普及にも尽力した。大正期から長く埼玉県・浦和に居を定めたが、戦時中は下館に疎開、さらに戦後の1946(昭和21)年には日光に移住。同地で制作を続けていたが、脳溢血のため、67歳で急逝した。

武内のパステル使用法の特徴は、緻密な塗り重ねを多用したものから、点描的なもの、線を用いた速写的なものまで幅広いことで、しばしば素材の使用法などに独自の研究と実験も行った。



⑦ 武内鶴之助 《雷鳴》 制作年不詳 パステル・紙 個人蔵

矢崎千代二(やざき ちよじ)

1872/2/12(神奈川県・横須賀市)～1947/12/28(北京)

1872(明治5)年、神奈川県横須賀市生まれ。曾山(大野)幸彦に入門し、洋画の手ほどきを受けた。1897(明治30)年、東京美術学校西洋画科選科に入学。黒田清輝に師事し、白馬会会員となる。1904(明治37)年、セントルイス万国博覧会事務局に勤めたことを機にアメリカからヨーロッパに渡り、1909(明治42)年に帰国。黒田らの発起により交詢社で個展を開催した。

1916(大正5)年に中国に赴き、1919年に一旦帰国した後、インドに渡る。この頃からパステル画を本格的に始めたと考えられ、刻々と移り変わる風景を多く描いている。続いて、イタリア、フランス、イギリスを歴遊。パリで開催した個展は高評価を受け、現地の美術冊子でも紹介された。

1926(大正15)年の帰国後は、自身が創出した国産パステルを使ってパステル画講習会及び展覧会を開催し普及に努めた。1930年(昭和5年)に朝日新聞社嘱託として南米に渡り、南米移民の様子ほかを新聞や自著『南米絵の旅』で紹介した。この間、アルゼンチン滞在中に帝展推薦となる。その後、東南アジアでも旺盛に制作。1935(昭和10)年にはしばらくぶりに日本で活動し、各地で個展を開催した。

1937(昭和12)年から、中国大陸はじめ東アジア各地で制作。北京で終戦を迎え、帰国することなく、1947(昭和22)年、75歳で死去した。北京では北平芸術専門学校で指導にあたっていたと考えられ、徐悲鴻から講師に招聘された際、矢崎の意思により終生持ち歩いてきたと推察される1008点の作品を寄贈。現在、それらすべてが北京中央美術学院美術館に所蔵されている。北京中央美術学院開学の際の唯一の日本人指導者として位置づけられている。

矢崎は世界各地を歴遊し、旅で出会う瞬間の風景を描きとめるため、パステルによる「色の速写」という手法を唱えた。岡田三郎助に「其の瞬間の写生」、中澤弘光には「動的なスケッチ」と評されたスナップショットのような臨場感のある表現とともに、油彩に匹敵するパステル画の地位の確立を目指した。



⑧ 矢崎千代二 《マルセイユ》 1925 パステル・紙 目黒区美術館蔵

タイトル	目黒区美術館開館 30 周年記念 が 日本パステル畫事始め ー武内鶴之助と矢崎千代二、二人の先駆者を中心に
会 期	2017 年 10 月 14 日(土)ー11 月 26 日(日) (38 日間)
会 場	目黒区美術館 (東京都目黒区目黒 2-4-36)
開館時間	午前 10 時ー午後 6 時 (入館は午後 5 時 30 分まで)
休 館 日	月曜日
観 覧 料	一般 1000(800)円、大高生・65 歳以上 800(600)円、中小生以下無料 ※ 障がいのある方は半額・その付添者 1 名は無料、()内は 20 名以上の団体料金 目黒区美術館では、開館 30 周年を記念して区民割引を実施しています。目黒区内在住、在勤、在学の証明書を受付でご提示いただくと、団体料金扱いとなります。(他の割引との併用はできません)
主 催	公益財団法人目黒区芸術文化振興財団 目黒区美術館 読売新聞社、美術館連絡協議会
協 賛	ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網、 サッポロホールディングス株式会社
交通機関	JR 山手線・東急目黒線・東京メトロ南北線・都営三田線＝目黒駅下車徒歩 10 分 東急バス＝権之助坂(目黒通り)下車徒歩 5 分、田道小学校入口(山手通り)下車徒歩 3 分 (目黒区民センター隣接)

広報写真

本リリース掲載の写真画像(下記 1～8)ほかを本展広報用写真としてご提供いたします。
ご希望の方は、申込用紙(4 ページ目)の内容をご確認の上、必要事項をお書き添えいただき、FAX でお申し込みいただくか、同内容を本展担当者宛メールにてお申し込みください。
画像は一括ダウンロードとなります(当館からの返信メールでお知らせします)
当初は本リリース掲載のものをダウンロード可能ですが、順次使用可能な画像は増加する予定です。

- 1 現在の『 Gondra 』パステル
- 2 武内鶴之助 《 ロンドン郊外 》 1908 ～ 12 パステル・紙 目黒区美術館蔵
- 3 武内鶴之助 《 雲 》 1908 ～ 12 パステル・紙 目黒区美術館蔵
- 4 武内鶴之助 《 風景 》 1908 ～ 12 パステル・紙 目黒区美術館蔵
- 5 矢崎千代二 《 モンマルトル 》 1921 パステル・紙 郡山市立美術館蔵
- 6 矢崎千代二 《 リオデジャネイロ風景 》 制作年不詳 パステル・紙 郡山市立美術館蔵
- 7 武内鶴之助 《 雷鳴 》 パステル・紙 個人蔵
- 8 矢崎千代二 《 マルセーユ 》 1925 パステル・紙 目黒区美術館蔵

問い合わせ先

プレス担当

デイリープレス：山本 真澄 (mob. 090-4062-6361)
tel. 03-6416-3201 fax. 03-6416-3202
e-mail: masumiyamamoto@dailypress.org

宛先：デイリープレス 〔担当〕 山本 宛て
FAX：03-6416-3202 E-mail：masumiyamamoto@dailypress.org

- 本票に必要な事項をご記入のうえ、上記宛先まで FAX でお申し込みいただくか、メールにて本票と同内容の事項をお知らせ下さい。掲載紙・誌を 1 部ご寄贈くださいますようお願い申し上げます。

お申し込み日	年	月	日
御社名			
ご担当者氏名			
住 所	〒		
TEL		FAX	
E-mail			
掲示媒体名 (雑誌名など)			
メディアの形態	【紙媒体】 新聞 / 雑誌 / ミニコミ誌 / フリーペーパー / その他 () 【電子媒体】 テレビ / ラジオ / WEB サイト / 携帯サイト / その他 ()		
発行・放送予定日	年	月	日
画像使用条件 必ずご確認ください	* 写真画像への文字のせは不可です。 * 写真の画像加工(トリミング・色調整など)は不可。 但し、モノクロで使用の場合は、コントラスト、ガンマ値の適宜 調整を許可する場合があります。 * キャプション、クレジットは必ず明記してください。		
連絡欄			

- お申し込み受け付け後、画像データ(複数 JPEG を ZIP 化)の一括ダウンロード先を返信でお知らせいたします。
お手元の環境等によりダウンロードできない場合は別途ご連絡ください。
- 使用にあたっては、【広報用画像について】の内容をご了承いただくことが条件となります。
必ずご確認くださいませますようお願いいたします。

【広報用画像について】

- ・ 画像データはメールにて一括ダウンロード先を送付いたします。
- ・ 画像は展覧会紹介の目的のみにご使用ください。
- ・ データを第三者に渡すことは禁止いたします。
- ・ 使用後、データは破棄してください。
- ・ 展覧会の名称、期間、会場などの情報は分かりやすく掲載してください。
- ・ 画像への文字載せは不可です。
- ・ 画像使用の際は、キャプション、クレジットを明記してください。
- ・ 掲載誌(紙)は 1 部、当館担当者までお送りください。
- ・ Web サイトは公開後に URL をお知らせください。
- ・ 当館が掲載内容を確認できるように、掲載前に校正をお送りください。

◎ 本展を紹介してくださる媒体には、展覧会の招待券(5 組 10 名様)を読者プレゼント用に提供いたします。
ご希望の方は下記にご記入ください。
読者プレゼント用招待券を [希望する ・ しない]

< 広報用画像に関する問い合わせ先 >

デイリープレス
担当：山本 (mob. 090-4062-6361)
tel. 03-6416-3201 fax. 03-6416-3202
masumiyamamoto@dailypress.org